

清月吟詠句集

二〇一五年版

本書は、インターネット清月俳句会において平成二六年の立春から平成二七年の節分までの間に多くの佳句を残された皆様の合同句集です。

目次

あとがき	時計草	初心	花筏	絵本館	根深汁	花の冷	初音	雛御選	春の雪	海の日	長良川	船祭
・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	野田ゆたか	瀬尾睦夫	後藤允孝	渡邊春生	田村公平	筒井省司	清水恵山	山口美琴	池下よし子	橋本幹夫	石崎そうびん	木村宏一
96	88	81	73	65	57	49	41	33	25	17	9	1

船祭

木村宏一

大川に手締いくども船祭
春寒も見渡すかぎり日の光
春さぐる立木の枝の空高く
枝垂梅紅白そろう門構
鍬先の土ころころと春を舞ふ

親善の強き絆や花水木

かにかくにさくらさくらの祇園かな

青嵐大樹を揺らし雲までも

卯の花やこばれて白し月の夜

学生の足音軽し樟若葉

光跡に光跡かさね恋蛍

蝸牛何処に急ぐにわか雨

河鹿鳴く枕を抱いて聞く夜かな

窓開けて引き込む闇や青葉木菟

山の駅乗り込む蟬の合唱団

木村宏一

木村宏一

咲き変わる化粧直して花木槿

遠花火記憶新たに旅の中

浮見堂ぐるり取巻く虫の声

露草の儂さ滲む藍の色

秋灯や拡大文字の電子辞書

保育士の大きな身振り運動会

新松子つんと尖りし寡黙なり

風なくてばさりばさりと朴落葉

柿落葉個性豊かに染まりをり

皇帝と呼ばれし花や冬の庭

木村宏一

木村宏一

吹き荒ぶ風が命の霧氷かな
冬晴や日時計の影やわらかに
見詰め合ふ瞳に映る聖樹の灯
七種粥吹けば緑の匂ひ立つ
寒晴や靴音軽く尾根の道

木村宏一

霧氷林見上げて空の高さかな
朝練のトランペットの冴返る
節分や細巻きにして老二人

木村宏一

長良川

石崎そうびん

はだれ野やどよめき奔る長良川

石崎そうびん

蜺搔き夕陽に向かふ帰り舟

船見えぬ七里の渡し涅槃西風

窯出しの白磁大皿風光る

一夜城一気に花の散りつくす

うららかや子供の手品種みえて

鐘突きて淡海の春を惜しみけり

三川を自在に行き来夏つばめ

麦秋やモザイク柄の美濃平野

川沿ひに続く札所や夕河鹿

石崎そうびん

老鶯や伊賀と甲賀は谷伝ひ

石崎そうびん

片陰の尽きて古町途切れけり

遠き日の勤労奉仕草いきれ

白粥の喉にするりと今朝の秋

空海の修行の岩屋浜万年青

火口湖のかぎりなき蒼天高し
照り翳る陣屋の白洲桐一葉
籠堂へ紛れこみたり秋の蝶
黒光る放牧の牛秋日濃し
威銃一乗谷を揺るがせり

石崎そうびん

炊きあがる鮎の甘露煮夕しぐれ
枯葦や影黒々と比良比叡
根尾谷の落日早し雪ばんば
縁側に誰か来さうな小春かな
職ひきて風の吹くまま枯尾花

石崎そうびん

羽目板に響く気合や寒稽古

夫々がそれぞれのこと日向ぼこ

石崎そうびん

海の日

橋本幹夫

海の日や満艦飾の大湊

橋本幹夫

海女どもの四方山咄磯竈

恋猫の修羅や火宅を嘲笑ふ

引絞る駒の手綱や頼朝忌

火男の面もかなしき大石忌

風ぬくし鹿の擦り寄る島の昼

荒東風に明日の風読む漁師かな

銀色の雨や山桜桃の花真白

星空の海にサファイヤ蛍鳥賊

山川草木雨の八十八夜かな

上蔭の生業競ふ家二軒

やはらかに君眠る夜の椎落葉

筒抜けの噂話や籠枕

一心に君影草の香りけり

夏至の夜の銅鑼泣きじやくる大洗

橋本幹夫

橋本幹夫

ささくれし指を潤す苔清水

争乱は何時も何処かで雲の峰

木漏日の甘きみちのく萋の花

山車曲り小兵打つ飛ぶ大手町

典子忌の白き願の糸に雨

男郎花流るる風に逆らはず

石狩に青き空あり鮭遡る

邯鄲の声の中ゆく夜汽車かな

竹の実を嚙んで演習場の夜

縄文も弥生の里も天高し

橋本幹夫

橋本幹夫

息災に同胞集ふ亥の子餅
曳行の駒と立寄る秋の川
宮仕へ終へて啜れる十夜粥
駄駄捏ねる駄馬の前脚牧じまひ
困はれて檻に忙しき狸かな

橋本幹夫

弾丸が耳を掠める鎌鼬
何事も元日なれば赦されて
初風呂や薩摩隼人の一番湯

橋本幹夫

春の雪

池下よし子

鶯娘 狂ふがごとく 春の雪

池下よし子

おほかたは 木々 錆色の梅 二月

快音の 少年 野球 風光 する

うぐひすの 啼く声 いたまたとのはず

子のくれし 白詰草の ブーケ かな

リラ冷えや堂の奥なるマリア像
花びらの共に入り来る自動ドア
どの道も今を盛りの花水木
颯爽と紺のスーツや若葉光
そぞろ歩の疏水の小径若葉風

池下よし子

サングラスかけて僧侶の黒鞆
煮凝の揺るる琥珀や江戸切子
百日紅一樹明るき診療所
掬花の凜と右巻きひだりまき
風遊ぶ丹波城下の軒風鈴

池下よし子

青鯖に塩たつぷりと船場汁

比良仰ぐ生水の郷や稲の秋

空蟬の夕日に透ける琥珀玉

遅れ来て手もとせはしき秋扇

金木犀路地いつせいに匂ひ初む

池下よし子

拓本の歌碑打つたんぽ秋高し

池下よし子

潮風に鳥渡り来る船泊り

秋映す八幡堀の水鏡

借景の叡山模糊と風炉名残り

新米の手のひら熱き塩むすび

捨つるものすてしより冬支度
月光のたふとし後の十三夜
黄落や崩れゆくものみな愛し
身に入むや塔を支ふる天邪鬼
玄冬の雨に消えたる桜島

池下よし子

数へ日やメモを片手の押すカート
総領のをのこ踊るや初笑
福袋手にいつぱいの三日かな

池下よし子

雛御膳

山口美琴

寿司店のメニュー―新たに雛御膳

束の間の青空消えし春時雨

探梅や記憶にありし一軒家

街路樹の日々芽吹きゆく光かな

土筆摘む小鉢に少し卵とじ

山口美琴

バス遅れ良きことありて初音なり

石楠花や幾何学模様なる蕾

単線の車窓も楽し山桜

昭和の日身辺整理惜しまずに

夏立つや乙女の足の長きこと

農道を車疾走麦の秋

子供の日親子サッカー交流す

日差し出てひととき遊ぶ梅雨の蝶

紫陽花や天より受くる色模様

真つ二つメロンの香るティータイム

山口美琴

山口美琴

仙人掌や鎌首のばし一夜花
蟬しぐれ無賃乗車山の駅
控へめに茗荷の花の白さかな
くつきりと連峰望む今朝の秋
プラレール児の世界なる夏座敷

山口美琴

蟋蟀や一番に鳴く厨口
桔梗咲く源氏の館古都の旅
一片の雲なき空や菊日和
初物と子らに届けし栗ご飯
雨去りて色鮮やかに里紅葉

山口美琴

街路樹の刈られて広き冬の空
落つるものすべて落として山眠る
水仙や白きベールを脱いで咲く
蕪を煮る甘き香りや夕厨
税といふ漢字で終わる師走なり

山口美琴

老いてなほ出会ひ嬉しと初便
庭の隅一樹華やぐ寒椿
羊と茄子祝ひ菓子添へ福茶なり

山口美琴

初音

清水恵山

初音かな声それぞれにあどけなく

清水恵山

魁て楓真紅の芽立ちかな

お塔婆をカタカタ鳴らす春の風

古民家の裏のあちこち桑の花

巢燕の数確かめて今日終る

アルプスの湧水の音山葵田に
旧道の軒並み低く菖蒲葺く
桑断ちや上族の時期来るらし

渡月橋囃子の舟や西祭

馬鈴薯の花果てしなき大地かな

清水恵山

咲き誇る浜昼顔や九十九里

清水恵山

田水張る千枚田みな山映し

水貝の一つ一つに磯香る

花莫塵の疲れを癒す香りかな

乾杯はビールの泡の消えぬ間に

走り来よ苧殻は長き足なれば
球児去り甲子園はや新涼に
棚経の僧へ静かに風送る
高原を天へ繋げて蕎麦の花
サロベツの花野の果てや利尻富士

清水恵山

蹲踞の手水の音や貴船菊
瀬しぶきの魚道の石や崩れ築
馬肥ゆる北の大地の草原に
晩年と言はるゝ歳や身にぞ入む
恙なく生きて勤労感謝の日

清水恵山

恩徳讃締めには謡へり御取越
ご神座は整頓されて神の留守
アルプスの威を前にして雪囲
漁師等の待ちに待ちたる鮒起し
ストーブを囲む駅舎の国訛

清水恵山

健康に馬齢を重ねお元日
記念日に印をつけて初暦
余生には夢まだありて年迎ふ

清水恵山

花の冷

筒井省司

窓際で熱きコーヒー花の冷

筒井省司

生垣の椿燃え尽きぽとり落つ

いずこまで帽子転がす春一番

春の川身動きもせぬ太公望

空青く桜葉散る露天風呂

照れくさし優先席の春の宵
夏野菜あれやこれやと狭き庭
ひとしきり舞って燐家へ揚羽蝶
雨のあとつやつやの肌柿若葉
郭公の声降るダムの遊歩道

筒井省司

初採りの胡瓜にもろみひとり酒
早朝の庭で一声時鳥
夏草を刈られ鎮座の道祖神
初蟬や社の階段登り来て
ぬっと出す妻の委中に土用灸

筒井省司

露草や束の間の藍輝かせ
丘を越え祭り音頭の流れくる
コンビニにコーヒー香る今朝の秋
間引菜のさみどりからむパスタかな
木犀の香気に行ったり来たりかな

筒井省司

雨戸閉め水割り二杯雨月かな
六地藏やさしき顔に菊香る
賽銭をあげて椎の実ポケットに
曇天を破るが如く百舌鳥猛る
短日や男料理の水餃子

筒井省司

稜線に落ち行く夕陽秋惜しむ
大根の畝果てしなき散策路
スーパーの広告目立つ師走かな
テラスからびよんぴよん覗く冬雀
十二月名簿に印す喪の葉書

筒井省司

看護師も医師も患者もマスクして
背比べ抜かれし孫と初参り
初富士や富津岬の波しぶき

筒井省司

根深汁

田村公平

ネクタイを外し春愁解き放つ

田村公平

合格の校門潜り青き踏む

出でては早や踏まれて育つ名草の芽

夕日へと舵切る船や花霞

春惜む昭和に消えし漁船団

老犬もぼそり顔出す花筵

くす玉を割って進水夏来る

新緑の街から街へ跨線橋

大阿蘇に赤牛の散る夏野かな

大輪が名札を隠す花菖蒲

田村公平

さつぱ船蓮の浮葉を分けて入る

田村公平

夏草へ反省会の腰下ろす

合宿のラジヲ体操明易し

十葉を引いて無口の庭師かな

噴く汗や胸板厚き甲板長

新牛蒡掻き揚げの香を独り占め
草いきれ抜けて広がる九十九里
連れ潮にエンジン軽き良夜かな
天空へ湯けむり昇る夜寒かな
越屋根の繰糸場跡秋高し

田村公平

新米に小首傾げる水加減
奉納の文字黒々と新走
廃屋の土塀彩る蔦紅葉
身の丈の暮らし豊かに根深汁
段ボール箱の電車に乗る小春

田村公平

回天の基地なる湾を鷹渡る
網揚げのマイクが木霊雪しまく
荒縄の男結びや冬囲
奈落より這ひ出る舳先寒怒涛
大漁の網に乗り来る冬鷗

田村公平

灯台の白亜染めたる初茜
二十年住めば都の雑煮かな
一瞬の突破にかけるラガーかな

田村公平

絵本館

渡邊春生

春の鳥啞えし魚を落としけり
もてなしの緑茶たまはる梅の寺
蛇穴を出でて読経の声を浴ぶ
耕の富士に向かひて畝を盛る
陽炎に揺れてローカル電車行く

渡邊春生

春風やテニスボールのよく跳ねて
空青し舞ひ立ちさうな山法師
宿坊の廊下広々若葉寒
万緑の空あをあをと鯉跳ねる
クールビズ緑の風を孕ませて

渡邊春生

まつすぐに夜店の町を抜けて来し
蛍の夜声密やかにかはしけり
夏帽子かぶり働き盛りかな
山鉾や夜風に物売りの声
青田波道者の声のはつらつと

渡邊春生

唐黍をもぐ百姓の力こぶ

すすき野の富士なだらかに海の入る

棚経の僧そそくさと帰りけり

小鳥来る動物園の休園日

樹の下に愛犬の墓秋うらら

渡邊春生

足腰を鍛へ高きに登りけり

渡邊春生

白壁に収まりきれず蔦紅葉

応援席陣取ること運動会

こすもすの風の中なる絵本館

窯出しの猪口に新酒を注ぎけり

山粧ふ遍路ころがしてふ山も
大楳や語れば辛き開拓史
雁木街背中丸めて通りけり
つれづれに焚火の人と話し込む
家族五人湯たんぽ五つ揃ひたる

渡邊春生

鶏鳴のいつもの時刻お元日
七種を摘む縄文の遺構の上
回覧に税務所便り年明くる

渡邊春生

花 筏

後藤允孝

野焼の火真つ赤に染むる日暮かな
もののふの戦の跡やおぼろ月
山焼や炎と怒号入り交じり
ラリ―終へテニスコートに春の風
沈丁の香の染みつきし石だたみ

後藤允孝

暫くは香りに満ちて梅の里
散つてなお水面彩る花筏
天空の城遠ざけて霞かな
漕ぐほどに身を乗り出して半仙戯
千年を手繰り寄せたり樟若葉

後藤允孝

夏めいて塗りかへてゐる海の家
時鳥鳴ひて深山欲しいまま
磯の香のただよふ渚星涼し
夏草や隠れて見えぬ石地蔵
風紋や浜昼顔の花言葉

後藤允孝

夏雲の沖で湧き立ちゆく高さ
ブライントー気に降ろし西日断つ
潮焼に背中がもえて眠れぬ夜
若者の町のファッション秋に入る
朝顔の雨に冴えたる濃紫

後藤允孝

一滴の滴りやがて大河なる
学ぶこと道のり遠き秋灯下
この先はけもの道なり男郎花
山小屋の番人去りて冬隣
秋耕の土柔らかき鋤の先

後藤允孝

冬と云ふ季の移ろひの年重ね
鴨一羽湖面に暮色こぼしたる
年の瀬や打つ手忙しきレジ娘
苦も楽もみんな忘るる年の果
霜柱踏みつつ老いの登り坂

後藤允孝

この一年成就を願ふ初神籤
玉砂利の音深くして寒詣
寒泳の古式ゆかしき立泳ぎ

後藤允孝

初心

瀬尾睦夫

寒戻り修行の僧も足早に
鞆に二人並びて片思ひ
寄り添ひて今をさかりと黄水仙
ことごとく大樹となりぬ青葉かな
参道に葉桜の陰濃かりけり

瀬尾睦夫

放水のシユプール描く五月晴れ
真つすぐに生きよと諭す花菖蒲
あめんぼのあめんぼ流の平泳ぎ
女子会のトーク弾けるソーダ水
若竹の風遊ばせてゐる梢

瀬尾睦夫

一歩ごとと違ふ紫花菖蒲
赤んぼの寝かされてゐる夏座敷
立秋や季節追ひ越すけふの雨
梨狩りや大玉狙ふ肩車
この石も先祖の一人秋彼岸

瀬尾睦夫

黒々と田にうづくまる稲架の闇
豆力士去りし土俵に秋の風
息白く還暦の朝迎へけり
うがいするコップに満てり寒の水
手話の手の素早く動き日の短か

瀬尾睦夫

枝打ちの山を鎮めて六花
生まれ来る命を待つや初氷
初詣何を願ふや小さな手
何もなきことの幸せ去年今年
人日や重ねて重き本の束

瀬尾睦夫

御神火の煙纏ひしとんどかな

時計草

野田ゆたか

清水の舞台袖より涅槃西風

酒肴など瀬の祭のありやうに

菜種御供供華参らす化粧稚児

金婚を祝ぎくるる孫暖かし

春雪の積る気配のなく降れる

亀鳴くや謎がなぞ生む写楽の絵

銃持たぬ兵隊ばかり蝸蚪の国

長閑けしや花柄着せし犬連れて

雨やんで茅花流しの夜となりぬ

新緑の日の斑揺れいる御幸道

野田ゆたか

野田ゆたか

限りある命をしめよ火取虫
人生の遅れ戻せず時計草
蠟涙の一灯灰と五月闇
鬪ひの姿勢崩さず兜虫
ヒーローの言葉涼しきお立台

野田ゆたか

淋しげに逢魔が時の秋の蟬
無縁塚一つひとつに盆の月
一湾の闇を深めて野分涛
勅祭の格式いままも放生会
蓑虫にありし好みの糸の丈

野田ゆたか

蕉翁を偲ぶ松島秋時雨

釣人の去りてかもせる荻の声

二階窓開けて花街の十三夜

藪騒は魑魅の声めき秋寂ぶる

一茶忌や人の世のもの愛おしき

宮小春源氏名らしき恋の絵馬

使ひ捨てマスクに表裏ありにけり

岬の戸の玻璃ふるはせて鯿起し

酔ひ痴れしままに枯れゆく芙蓉かな

鴨川に群れて人恋ふ百合鷗

野田ゆたか

野田ゆたか

滝飛沫五体に浴びて寒垢離女

粹筋のついで詣での礼者かな

余生なほ自在に生きて齋粥

野田ゆたか

あとがき

PDF 印字用合同句集「清月吟詠句集」のインターネットアップは、三度目となりました。

この句集も来年（平成二十八年）六月末の清月俳句会閉会により絶版となりますが、来年も多くの佳句を残された皆様の句を吟詠句集にまとめたいとおります。

この句集は、和綴じにして完成するものですが、これまでの句集の各自の頁を抜粋して綴じますと各自の句集ができます。

また、この句集の絶版後も皆さんにおかれまして年間三〇句余りを残すことができましたら一〇年で三〇〇句ぐらいが残りますので句集の自費出版も容易になります。

この様な事を思ひながらこの句集をまとめました。

平成二六年五月吉日

大阪にて 野田ゆたか

合同句集参加者ご芳名

	ご芳名	在所	入会年月
1	木村宏一	大阪	平 15.07
2	石崎そうびん	岐阜	平 19.05
3	橋本幹夫	岡山	平 20.06
4	池下よし子	吹田	平 21.11
5	山口美琴	三重	平 22.01
6	清水恵山	千葉	平 22.07
7	筒井省司	千葉	平 23.07
8	田村公平	千葉	平 24.10
9	渡邊春生	静岡	平 25.01
10	後藤允孝	三重	平 25.06
11	瀬尾睦夫	鳥取	平 26.02
12	野田ゆたか	大阪	

発行
2015年6月1日

発行人
野田ゆたか

発行所
清月庵
(大阪府枚方市)

清月俳句会のホームページ
<https://haiku575.info/seigetukai/home/home.htm>